

行為の理由に関する心理主義，反心理主義，選言説 —知覚の哲学を参照して—

鈴木 雄大

行為の理由とは何かという問題に関して，D. デイヴィドソン以降，「心理主義 (psychologism)」と呼ばれる立場が標準的な理論であり続けてきた。心理主義は行為の理由を，信念や欲求といった行為者の心的状態とする。これに対して近年，行為の理由を行為者の心的状態ではなく，むしろそうした状態の対象とする「反心理主義 (anti-psychologism)」の立場が盛んになりつつある。そしてそれに伴い，第三の立場である「選言説 (disjunctivism)」も登場した。

最後のものに関して，もともと「選言説」という名称は，知覚の哲学における一立場を表すために造られた言葉であった。それが行為の理由¹に関する一立場を表すためにも用いられているのは，行為の理由に関する選言説が，知覚に関する選言説と同型の議論を含んでいるからにほかならない。本論文の主要な狙いは，この同型性に着目し，より先行的に論じられている知覚の哲学を参照することで，行為の理由に関する諸々の立場の関係を整理することにある。これにより，行為の理由に関する心理主義，反心理主義，選言説のそれぞれが，知覚に関する代表的な立場であるセンスデータ論，志向説，選言説のそれぞれとある種の対応関係にあることが分かるだろう。

こうした整理に加えて，知覚に関する議論は，行為の理由に関する議論に新しい洞察を与えてくれる。私は本論文で行為の理由に関して，反心理主義を擁護する議論を素描的な形で展開したが，さらに知覚に関しそれに対応した立場である志向説を参照することで，反心理主義に志向性の概念を導入することを試みた。

以下ではまず，知覚の哲学におけるセンスデータ論，志向説，選言説を順に概観し（第1節），そしてそれぞれと同型の議論を含むものとして，行為の理由に関する心理主義，反心理主義，選言説を順に整理し，その中で反心理主義

の擁護論を展開する（第2節）。

1. 知覚に関する三つの立場

知覚に関する志向説と選言説はセンスデータ論への批判のもとで生まれたため、まずセンスデータ論の議論を押さえ、それから残り二つの立場を見ていく。

1.1 センスデータ論

センスデータ論には「幻覚論法」という有名な論証があり（ここでは簡単のため錯覚のことは脇に置き、幻覚だけに焦点を絞る）、それは次のようなものである（Fish (2010, 12-14) を参考に、本論文の目的に合わせて簡略化して示した）。

1. 主体にとってあるものが存在するように見えるなら、主体が気づいている何かが存在する。（現実性原理 P²）
2. 幻覚では、実在物はないのに、主体にとってあるものが存在するように見える。
3. （1と2より）幻覚では、主体が気づいている何かが存在する。それは実在物ではなく、センスデータと呼ばれる。
4. 主体が識別することのできない知覚と幻覚は、同じ種類の心的状態である。（共通項原理 P）
5. （3と4より）知覚でも、主体が気づいている何かが存在するが、それは実在物ではなく、センスデータである。

1の現実性原理Pは、主体にとってあるものが存在するように見えるということから、主体が気づいているものの存在を導く原理である。たとえば白い何かが柳の下に立っているように私に見えたなら、それが実在物であるかどうか

にかかわらず，とにかく私が気づいた白い何かが存在していなければならないというわけである．2は幻覚に関して一般に認められる事柄であり，幻覚に関する限りで1の前件を満たし，そうして1と2から3（幻覚に関する限りでの1の後件）が出てくる．4の共通項原理Pは，3までで幻覚に関して言われた帰結を，知覚にまで拡張する働きをしている．そうして，幻覚において主体が気づいているものがセンサーデータであるなら，知覚においても主体が気づいているものは実在物ではなく，センサーデータであるということになる．

1.2 志向説

ところでセンサーデータ論の帰結は，「知覚において主体が気づくのは実在物である」というわれわれの直観に反する．もちろんセンサーデータ論はこの直観を拒否するわけだが，この直観を守ろうとする者は幻覚論法の諸前提のうちどれかを拒否する．

志向説 (intentional theory) と呼ばれる立場が拒否するのは現実性原理Pである．つまり志向説は，主体にとってあるものが存在するように見えるということから，何かが存在することを導出することに反対する．志向説が代わりに提案するのは，知覚と幻覚のそれぞれを現実を志向するものとして捉えるアイデアである．それによれば知覚と幻覚は，前者の志向内容は現実と一致しているのに対し，後者の志向内容はそうではないという点で区別される．志向性は対象の存在を必ずしも含まないことがその一特徴であるゆえ，志向説は，センサーデータ論のように幻覚の場合にも何らかの存在者を要請するということをせずに済む．ちなみに志向説は，知覚と幻覚を共に現実を志向する同種の心的状態として捉えるため，共通項原理Pは受け入れている．

1.3 選言説

知覚に関する選言説は志向説とは別の道を取り，共通項原理Pの方を拒否す

る。すなわち選言説によれば、知覚と幻覚は全く異なった種類の心的状態であり、知覚が実在物によって部分的に構成されているような心的状態であるのに対し、幻覚は実在物をその部分として含まない。

2. 行為の理由に関する三つの立場

冒頭で述べたように、心理主義は行為の理由を行為者の心的状態とする立場であるのに対し、この心的状態を「M(p)」と表記するならば（「p」は心的状態の対象を表す）、反心理主義は行為の理由を p とする立場である。他方で選言説は、後で見るように、心理主義と反心理主義のそれぞれの長所を併せ持ち、それぞれの短所を免れているような折衷的な立場である。ではそもそもどうして、行為の理由を M(p) とするか p とするかという見解の相違が生まれるのか。ここではまずその点を理解するため、次のような四つのケースについて見ておきたい。

ケース1 夏の海で、私は虫を追い払おうとして友人の背中を叩いた。すると友人は怒って私がそうした訳を尋ねるので、私は「虫を追い払ったのだ」と答えた。実際に虫は友人の背中から離れていった。

ケース2 夏の海で、私は虫を追い払おうとして友人の背中を叩いた。だがよく見ると虫だと思ったものは友人のホクロだった。友人は怒って私がそうした訳を尋ねるので、私は「虫を追い払おうと思ったのだ」と答えた。

ケース3 私が「虫がいたのだ」と答える以外、ケース1と同じ設定。

ケース4 私が「虫がいると思ったのだ」と答える以外、ケース2と同じ設定。

ケース1で私は「虫を追い払う」という行為の目的を理由として挙げているのに対し、「虫がいる」という私の信念が誤っていたケース2では、その目的を自指していたという自らの心的状態を理由として挙げているように見える。また、ケース3で私は「虫がいた」という事実を理由として挙げているのに対し、虫についての信念が誤っていたケース4では、「虫がいる」と信じていたという自らの心的状態を理由として挙げているように見える。つまり虫についての私の信念が真のときに挙げられる理由 p （ケース1では「虫を追い払う」という目的、ケース3では「虫がいる」という事実）に対して、虫についての私の信念が偽のときには $M(p)$ が代わりに理由として挙げられているように見える。このことから、ケース1と3が反心理主義に支持を与え、ケース2と4が心理主義に支持を与えるというように考えられるかもしれない。だが次のような直観が働かないだろうか。「行為者の信念が真である通常の場合には、行為は目的や事実によって説明されるのであって、行為者の心的状態は、行為者の信念が偽である例外的な場合において初めて言及される」と。しかしこの直観はさほど強いものではないし、心理主義はまさにこの直観を拒否するのである。（以下ではしばらく、 p に相応しいのは目的と事実のどちらであるかということはオープンにしておく。）

2.1 心理主義

なぜ行為の理由に関する標準的な理論として、心理主義がこれまで多くの人によって支持されてきたのだろうか。心理主義の主張を支えるものとして、センスデータ論の幻覚論法と同型の議論を構成することができると私は考える。

1. 行為を説明する理由は、成立している何かである。（現実性原理 R_A ）
2. 行為者の信念が偽のときにも、行為を説明する理由がある。
3. （1と2より）行為者の信念が偽のとき、行為を説明する理由は、成立している何かである。それは成立していない p ではなく、 $M(p)$ である。

4. 行為者の信念が真であれ偽であれ、行為を説明する理由は同じ種類のものでなければならない。(共通項原理 R A)
5. (3と4より) 行為者の信念が真のときも、行為を説明する理由は p ではなく、 $M(p)$ である。

1の現実性原理 R Aは、行為の理由説明文を**事実含意的** (factive) だとする原理だと言うこともできる。事実含意的な文とは、その内に含む文を含意するような文のことであり、事実非含意的 (non-factive) な文とは、その内に含む文を含意しないような文のことである。たとえば「彼は神がいると知っている」という文は「神がいる」という文を含意するゆえに事実含意的であり、「彼は神がいると信じている」という文は「神がいる」という文を含意しないゆえに事実非含意的である。そして行為の理由説明文が事実含意的であるとは、たとえば「私がそれをしたのは x ゆえだ」という文が、文「 x 」を含意するということである。理由について述べている「 x 」が真なら理由 x は成立したものであるゆえ、現実性原理 R Aは、行為の理由説明文が事実含意的であることを言ったものに等しい。

2は一般に認められる事柄である。先のケース2ケース4では、虫についての私の信念は偽だったが、「虫を追い払おうと思った」や「虫がいると思った」と言うことで私は友人の背中を叩いたことにたしかに理由説明を与えていた。

こうして1と2から3が出てくる。行為者の信念が偽のときの行為を説明する理由が p でありえないのは、行為者の信念が偽のときには、 p (ここでの例では、私が虫を追い払うことや、虫がいること) が成立しておらず、成立していないものは(1より) 行為を説明する理由とはなりえないからである。対して $M(p)$ がそこでの行為を説明する理由であるとされるのは、「虫を追い払おう」と思ったことや「虫がいる」と思ったことは、たとえ虫がいなかったとしても、行為者の心的状態として現に成立していることだからである。

最後に、4の共通項原理 R Aは、信念が偽の場合に関して言われた3までの帰結を、信念が真の場合にまで拡張する働きをしている。たしかに行為者の信

信念が真であるか偽であるかに応じて、行為を説明する理由がころころ変わるのは奇妙であろう。こうして、信念が偽のときに行為を説明する理由が $M(p)$ であるなら、信念が真のときもそれは p ではなく $M(p)$ であることになる。

2.2 反心理主義

先述の「通常、行為を説明するのは、目的や事実であって、行為者の心的状態ではない」という直観を守ろうとする者は、心理主義の議論における諸前提のうちどれかを拒否することになる。ところで反心理主義の代表的な論客である J. ダンシーは、行為の理由説明文は事実非含意的であるという主張を彼の議論の中核の一つとしている (cf. Dancy 2000, 131–134)。彼のその主張が議論全体の中でもつ役割を明瞭に理解するには、知覚に関する幻覚論法をもとに構成された心理主義の議論の諸前提のうち、彼の主張がどれに対する否定になっているかを考えるのが有益である。そして前提 1 の現実性原理 RA は、行為の理由説明文が事実含意的であることを言ったものに等しかったのだから、行為の理由説明文が事実非含意的であるという彼の主張は、現実性原理 RA に対する否定になっていることが分かる。つまり反心理主義は、行為を説明する理由が必ずしも何か成立しているものでなくともよいと考えるゆえに、行為者の信念が偽の場合にも、行為を説明する理由として何か成立しているものを求め、成立していない p の代わりに成立している $M(p)$ を選ぶ、ということをしなくてよいようになる。反心理主義は、現実性原理 RA の否定によって、行為者の信念が偽のときも、行為を説明する理由として p を選ぶことができるのである。

現実性原理 RA の否定の正当性については、ここでこれ以上踏み込むことはしない。現実性原理 RA の否定は、心理主義の議論の前提を攻撃することで、そこからの帰結を防ぐものであったという点で、いわば消極的な主張にすぎなかった。では反心理主義の積極的な主張は何なのか。つまり反心理主義は何ゆえに行為の理由が $M(p)$ でなく p であると考えなのか。出発点は「通常、行為を説明するのは、目的や事実であって、行為者の心的状態ではない」という直

観にあった。なるほど、虫についての私の信念が真である通常のケース1とケース3でも、友人の背中を叩くという私の行為は、「虫を追い払おうと思ったのだ」や「虫がいると思ったのだ」という自らの心的状態に言及した形で説明できるように思われる。だがたとえそれが可能であったとしても、「虫を追い払ったのだ」や「虫がいたのだ」といった目的や事実に言及した説明の方がなお適切であるという直観が働かないだろうか。もし働くとしたら、それは一体なぜなのか。

これまで行為の理由を、行為を説明するものとして語ってきたが、行為の理由には行為を説明する役割だけでなく、行為を正当化する役割もあり、このことが近年注目を集めている³。ケース1やケース3で「虫を追い払ったのだ」や「虫がいたのだ」と言うことによって私は、「友人の背中を叩く」という一見良いところのないように見える行為を、その良い点を示すことで正当化しているのである⁴。そして説明と正当化という理由の二つの役割は、互いに独立したのではなく、たとえばケース1やケース3において行為は正当化されることによって説明され、虫がいなかったために行為が正当化されないケース2やケース4では、もし虫がいたなら行為を正当化していただろうものによって説明される。このことから、次の反心理主義の核心的なテーゼが出てくる。

規範制約⁵ 行為を説明する理由は、その行為を正当化するものでなければならぬ。

ではどのようなものが行為を正当化するのだろうか。友人の背中を叩くという私の行為を正当化するのには、「虫を追い払う」という目的や「虫がいる」という事態などである。前者の目的は、行為がそれを実現する（実際に虫を追い払う）ことによって現に行為を正当化し、後者の事態は、それが事実として成立する（実際に虫がいる）ことによって現に行為を正当化する。これに対して、「虫を追い払おうと思った」や「虫がいると思った」によって指示される私の心的状態は、私の行為を正当化するものではないように思われる。次の

例を考えてみよう。私は常に誰かに尾行されていると思っている。そこで「常に誰かに尾行されている」という事態は、もしそれが事実なら、私が警察に行くことを正当化するだろう。他方、「常に誰かに尾行されていると思っている」ということは、たとえそれが事実だとしても、私が警察に行くことを正当化しない。それが正当化するのはせいぜい私が病院に行くことだろう。それゆえ、 p がある行為を正当化するとき、 $M(p)$ は——無害な例外⁶を除いて——その行為を正当化しないと言えよう⁷。

以上によって、「通常、行為を説明するのは、目的や事実であって、行為者の心的状態ではない」という直観の根拠が示されたと考えられる。つまり行為を説明する理由が目的や事実であるのは、行為を説明する理由は行為を正当化するものでなければならないからであり（規範制約）、そして目的や事実は行為を正当化するからである。他方、行為を説明する理由が行為者の心的状態ではありえないのは、心的状態は行為を正当化しえないゆえに規範制約を満たさないからである。こうして反心理主義は規範制約に訴えることで心理主義を退け、自らの主張を擁護するのである。

本節の最後に、目的と事態ないし事実の間で、どちらがより行為の理由として相応しいかについて述べておきたい。まずダンシーは行為の理由を事態ないし事実と考えるが、事実は行為者の信念が偽のときには理由になりえないゆえ、事態の方が相応しいであろう。つまり行為者の信念が真のときは成立した事態（すなわち事実）が行為の理由であり、偽のときには成立していない事態が行為の理由となる。だがこの考えに対し、私は目的こそ行為の理由としてより相応しいものであると考える。ここでは私の考えへの決定的な支持となるものではないが、少なくとも動機づけるものとして、再び知覚の哲学との同型性に訴えかけたい。反心理主義は心理主義の議論の前提のうち現実性原理 RA を否定していたが、知覚に関してそれに対応する現実性原理 P を否定していたのは志向説であったゆえ、反心理主義は志向説と対応関係にある立場であると言える。ところで志向説は単に現実性原理 P を否定しただけでなく、知覚と幻覚をそれぞれ現実を志向する状態として捉えていた。対象の存在を含意しないこ

とが志向性の一特徴であるゆえ、幻覚が志向的状态であることは、幻覚において主体が気づいているものが存在しないことをよく説明する。こうした志向説に倣い、反心理主義も志向性の概念を導入することでその理論をより完成したものに近づけられると私は考える。それによれば、行為の理由は行為者によって志向されたこと——行為者が志向するという心的事実ではない——、すなわち行為の目的である。志向されたことは必ずしも成立しているとは限らないので、そのことは行為者の信念が偽のとき、理由が成立しているものではないことをよく説明する。友人の背中を叩く行為において、そこでは虫を追い払うことが志向されているが、「虫がいる」という事態はその行為によって志向され——実現が目指され——ていることではない。むしろ「虫がいる」という事態は、それが成立していることにより、「友人の背中を叩く」という行為を「虫を追い払う」と記述可能にする条件であり、それはそのような条件であることによって、二次的な仕方で行為の理由となっているにすぎず、一次的理由は「虫を追い払う」という記述によって定められた行為の目的であるように考えられる。

2.3 選言説

行為の理由に関する選言説は、知覚に関する選言説が共通項原理 P を否定したのに対応して、共通項原理 R A を否定する。つまり行為の理由に関する選言説は、行為者の信念が真であるか偽であるかに応じて、行為の理由の種類が異なったものになると考えるのである。すなわちそれによれば、行為者の信念が真のときの行為の理由は p であるが、偽のときには $M(p)$ になる⁸。選言説は行為者の信念が真のときの行為の理由を p とするゆえ、「通常、行為を説明するのは、目的や事実であって、行為者の心的状態ではない」という直観を守ることができるという長所をもっている。また、行為者の信念が真のときも偽のときも、成立しているものを行為の理由とするゆえ、現実性原理 R A を保持できるという長所も持っている。そのように選言説は、心理主義と反心理主義の

良いところ取りをしたような立場なのであるが，別のところで大きな問題を抱えているように思われる．以下では二つの批判点を挙げる．

まず選言説は，行為者の信念が偽の場合に関して，規範制約に違反する．規範制約によれば，行為を説明する理由は行為を正当化するものでなければならなかったが，選言説は行為者の信念が偽のときの理由を行為者の心的状態とするゆえ，信念が偽の場合に関してこの規範制約に反してしまうのである．実際ダンシーは，選言説に対してこの点を批判している (Dancy 2000, 144)．つまり反心理主義は，心理主義に対するのと同じ論拠によって選言説に反対するのである．

しかし選言説はさらなる大きな問題を内部に抱えているように思われる．それは共通項原理 R A の否定に関する．私は，行為の理由は行為者の信念の真偽にかかわらず同じものであるとする共通項原理 R A は，正しいと考える．これを否定する選言説では，行為者の信念の真偽に応じて行為の理由がころころ変わることになってしまう．次のような例について考えてみよう．私は山頂に生えていると言われる薬草を取りに山を登り始めた．登り始めの頃には，山頂に薬草があるという私の信念は真だった（つまり実際に山頂に薬草が生えていた）．しかし私が山を登っている途中，薬草は他の動物によって食べられてしまい，私の信念は偽になってしまった．選言説によれば，薬草が動物に食べられた瞬間に，私の行為の理由は，たとえば山頂に薬草があるという事実から，山頂に薬草があるという信念へと変化したことになる．そして私は，自分が山に登る理由がどちらであるか，山頂に達して薬草があるかどうかを確認してみるまで分からない．このことは，アンスコムによって示唆された「行為の理由は行為者によって観察によらずに知られる」という基本テーゼに反する．選言説はいくら他のところで長所をもっているとしても，この問題を抱えるかぎり，支持しえない立場であると思われる．

結論

本論文は、知覚の哲学における代表的な三つの立場を参照しながら、それぞれがどの前提を肯定し、また否定するかによって、行為の理由に関する心理主義、反心理主義、選言説の間関係を整理した。結果として以下のような表が得られる。

本論文ではまた、反心理主義を擁護する議論を素描的な形で展開し、志向説によって動機づけられつつ、行為の理由が行為において志向されていること、すなわち行為の目的であると主張した。

	現実性原理 共通項原理	現実性原理 共通項原理	現実性原理 共通項原理
知覚に 関する理論	センスデータ論	志向説	選言説
行為の理由に 関する理論	心理主義	反心理主義	選言説

註

1 本稿が扱うのは行為の理由に関する選言説だが、行為に関する選言説というものもある。選言説とは一般的に、成功例と失敗例の間の共通項を否定する考えのことであるが、行為に関する選言説では、行為の成功と失敗の間の「試み (trying)」という共通項や、また行為と単なる身体運動との間の「身体運動」という共通項が、否定される。これら行為に関する選言説については本稿では扱わない。

2 Fish (2010) では H. Robinson に倣って「現象原理」と呼ばれているが、ここでは行為の理由についても当てはまるように中立的な名称に改めた。またそれに付けられた「P」は「Perception」の頭文字であり、後に出てくる「RA」は「Reason for Action」の頭文字である。

3 行為の理由の二つの役割と，それを巡る諸論争に関する見取り図を得るには，Lenman (2009) を参照するとよい。

4 ここである行為を正当化するとは，その行為の良い点を示すこと以上でも以下でもない。後述のように，私は目的こそ一次的に行為を正当化するものだと考えるが，目的は多くの場合，そのための手段となっている点である行為が良いということを示す。

5 「規範制約」という名称はダンシーから借りてきているが (Dancy 2000, 103)，定式化は私によるものである。

6 p と $M(p)$ が同じ行為を正当化するケースはたしかに存在する。たとえば，病院に行くことでなぜか尾行がやむとき，病院に行くことは「尾行されている」と「尾行されていると思う」の双方によって正当化される。

7 本段落後半は，「虫がいると思った」という信念が背中を叩く行為を正当化しないことへの説明にはなっているが，「虫を追い払おうと思った」という意図ないし欲求が背中を叩く行為を正当化しないことへの説明にはなっていない。後者に関する議論のためには別稿を要する。

8 ここでは最も基本的なアイデアにもとづいた，素朴なタイプの選言説を想定し，それに対する批判を行っている。より洗練された行為の理由に関する選言説は，Hornsby (2008) や Alvarez (2010) に現れている。

文献

- Alvarez, M., 2010, *Kinds of Reasons: An Essay in the Philosophy of Action*, Oxford UP.
- Dancy, J., 2000, *Practical Reality*, Oxford University Press.
- Fish, W., 2010, *Philosophy of Perception: A Contemporary Introduction*, Routledge.
- Haddock, A., & Macpherson, F. (ed.), 2008, *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*, Harvard UP.
- Hornsby, J., 2008, "A Disjunctive Conception of Acting for Reasons," in A. Haddock & F. Macpherson (ed.) *Disjunctivism: Perception, Action, Knowledge*, p. 244–261,

Harvard UP.

- Lenman, J., 2009, "Reasons for Action: Justification vs. Explanation," in Edward N. Zalta (ed.) Stanford Encyclopedia of Philosophy <<http://plato.stanford.edu/entries/reasons-just-vs-expl/>>.